

平成26年

大河ドラマ

軍師官兵衛

放送決定!



先  
兵  
衛

ひ  
め  
の  
軍  
師  
衛

# その男、天下に秘する野望あり



## 【年表に見る官兵衛の生涯】

天文 15年	1546	小寺(黒田)職隆の嫡男として姫路城で生まれる。幼名は萬吉。
永禄 4年	1561	御着城で小寺政職の近習として仕える。
永禄 5年	1562	この頃元服し、官兵衛孝高と名乗る。
永禄 10年	1567	志方城主・楠橋伊定の娘を娶り、職隆に代わって姫路城代となる。
永禄 11年	1568	嫡男長政(幼名・松寿丸)が誕生。
永禄 12年	1569	龍野城主赤松政秀の米襲を青山の合戦で撃退する。
天正 3年	1575	主君政職に織田信長への帰属を説き、岐阜で信長に拝謁。名刀「圧切」を与えられる。
天正 4年	1576	英賀ノ浦(姫路市飾磨区)に上陸した毛利の大軍を迎え撃って大勝。信長より感状を贈られる。
天正 5年	1577	播磨入りした羽柴秀吉のために姫路城を提供。調略によって播磨の諸将を織田の味方につける。
天正 6年	1578	三木の別所氏ら播磨の諸将が毛利に寝返る。荒木村重が信長に謀反。村重説得のために有岡城(伊丹市)に入るが、捕らえられ土牢に幽閉される。
天正 7年	1579	有岡城が落城。自らの家臣に救出される。
天正 8年	1580	城主別所長治が切腹し、三木城落城。小寺政職が御着城から逃亡したため姓を小寺から黒田に戻す。秀吉に姫路城を譲り、職隆とともに国府山城に移る。揖東(いづとう)郡などで1万石を与えられ、篠の丸城(宍粟市)に移る。
天正 10年	1582	本能寺の変。秀吉に「中国大返し」を進言し、山崎の合戦で明智光秀を破る。
天正 11年	1583	キリスト教に入信する。(洗礼名・シメオン)
天正 15年	1587	九州征討の論功行賞で豊前6郡12万石の国守となる。豊前一揆を鎮定。
天正 16年	1588	中津城築城。
天正 17年	1589	家督を長政に譲り、「如水」と号す。
天正 18年	1590	秀吉の小田原城攻めに参加。小田原城に乗り込み、北条氏政、氏直父子に講和を勧め、無血開城に導く。
文禄 元年	1592	朝鮮外征軍の軍監となって出兵する。
文禄 2年	1593	朝鮮から許可なく帰国。秀吉の怒りを買い、頭を丸めて謹慎する。
慶長 5年	1600	関ヶ原の役。中津城にあって兵を募り、石垣原の戦いなどで勝利。九州の大半を制圧するが、家康の命に従い停戦する。
慶長 9年	1604	京の伏見屋敷で病没。享年59。

※表紙の甲冑:朱塗合子形兜 黒糸威胴丸具足 小具足付 福岡市博物館蔵・藤本健八撮影

## 黒田官兵衛と小寺

### 【官兵衛、姫路城に誕生】

黒田家が編纂した『黒田家譜(かぶ)』によれば、官兵衛は天文十五年(一五四六)十一月二十九日の朝に、姫路城で小寺(黒田)職隆(もとたか)の嫡男と

して誕生した。この日、姫路城は一面の雪景色で、家人らは英雄の誕生、家が栄える吉兆だと喜び合ったという。父職隆は御着城主小寺政職(まさき)のもとに仕え、城代として姫路城を預かる身。母は明石城主明石正風(まさかぜ)の娘。政職にその才を認められて十六歳で出仕し、翌年には初陣もおさめ、元服して官兵衛孝高(よしたか)と名乗った。

永禄十年(一五六七)、家督を継いで姫路城代となり、志方城主楠橋伊定(くしはしこれさだ)の娘を娶り、翌年には嫡男長政(幼名・松寿丸(しょうじゅまる))が生まれた。

そして永禄十二年(一五六九)、姫路に攻め入った龍野城主赤松政秀の三千の軍勢を青山の合戦で撃退。官兵衛の武名は一気に知れ渡ることになった。

### 【毛利でなく織田を選択】

天正三年(一五七五)、織田につくか毛利につくかで迷っていた政職に対し、官兵衛は織田につくよう説得。自ら岐阜城に使いに立ち、信長に中国(毛利)攻めを進言。信長から名刀「圧切(へしきり)」を与えられた。

翌年、小寺が織田についたことを知った毛利勢は、五千の兵を英賀

(あが)ノ浦に上陸させたが、官兵衛がわずかな兵で撃退。信長から感状が贈られた。

天正五年(一五七七)、羽柴秀吉の軍勢が播磨入り。官兵衛は先鋒となつて佐用城・上月城を攻め落とした。

官兵衛の働きによって、播磨の諸将も一度は織田につくと決めたが、翌年、三木城の別所氏らが毛利に寝返り、織田家の武将荒木村重

(むらしげ)までが有岡城で信長に謀反。官兵衛は村重を思いとどませようと単身城に乗り込むが、逆に幽閉されてしまう。ようやく一年後、有岡城の落城によって救出されるが、長い土牢暮らしで頭髪は抜け落ち、歩くことのできないほどの体になっていた。

### 【秀吉とともに播磨を平定】

天正八年(一五八〇)、「干殺し」と呼ばれる兵糧攻めで三木城もついに落城。最後まで抵抗していた小寺政職の御着城、三木通秋(みちあき)の英賀城、宇野政頼の山崎城も相次いで落城した。

こうして播磨を平定した秀吉は当初、三木城を中国攻めの本拠にと考えたが、官兵衛は海陸交通の要衝である姫路城こそ本拠にふさわしいと自らの居城を秀吉に差し出し、父職隆とともに国府山(こうやま)城に移った。

天正十年(一五八二)、官兵衛は秀吉に従って備中(岡山県西部)へ進撃。その前に立ちほだかったのが周囲を沼に囲まれた毛利方の備中高松城で、秀吉軍も攻めあぐねたが、堤防を築いて川の水を引きこみ、城を水没させるという官兵衛の水

攻めの策によって、落城寸前まで追い詰めた。

### 【天下へ！奇跡の中国大返し】

水攻めの最中の六月二日未明、信長が家臣の明智光秀に討たれるという本能寺の変が起こる。

以後の日付については諸説あるが、秀吉の陣に一報が届いたのは三日夜

のことで、茫然自失となった秀吉に官兵衛が「運が開けてきました。謀反人の光秀をお討ちになれば、天下があなたの手に入ってくるでしょう」と進言。秀吉は信長の死を隠して即座に毛利方との和睦を成立させ、六日から撤退を開始。八日に姫路城に戻り、その日の深夜に再び進軍を開始し、十三日の山崎の合戦で光秀を撃ち破るのである。

通常十日ぐらいいはかかる行程を実質七日で走破した戦史上稀に見る強行軍は、後に「中国大返し」と呼ばれるが、この一戦によって秀吉は天下人への階段を歩み始め、官兵衛の胸中にも「天下」への志が芽生えるのだった。

### 【秀吉との間のすきま風】

天正十一年(一五八三)、秀吉は「賤ヶ岳(しずがたけ)の合戦」で柴田勝家を討ち、天下を大きく引き寄せる。官兵衛が高山右近に導かれ、キリシタンになったのもこの頃で、洗礼名はシメオンといった。

その後も官兵衛は四国や九州征討に参画。秀吉の天下統一に貢献し、天正十五年(一五八七)には豊前六郡十二万石の大名となり、翌年中津城を築城。

ここで官兵衛は長政に家督を譲り、「如水」と号したが、秀吉の小田原城攻めにも参加。「戦わずして勝つ」という得意の調略をもって無血開城させるなど、軍師としての輝きは失っていなかった。

文禄元年(一五九二)には秀吉の朝鮮出兵の軍監として出陣するが、翌年許可なく帰国して秀吉の怒りを買い、官兵衛は頭を丸めて謹慎

した。二人の間に吹き始めた隙間風。いつの頃からか官兵衛は、その才を秀吉に恐れられていたのだった。

### 【ついでに天下への野望】

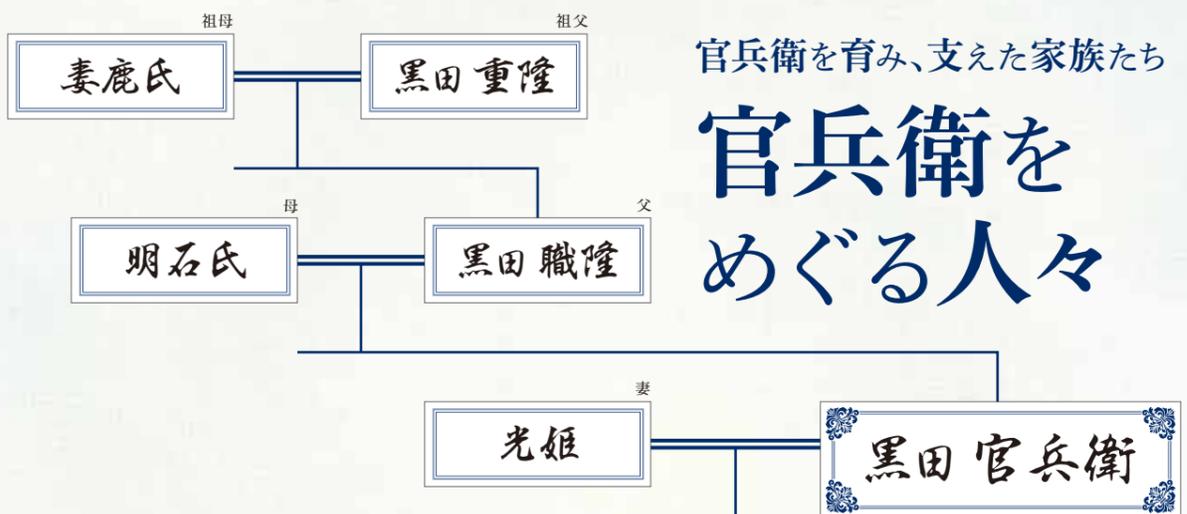
慶長五年(一六〇〇)、徳川家康と石田三成の対立が深まり、黒田家は長政が家臣を率いて家康の東軍につく。

同年九月、三成の挙兵を知った官兵衛は中津城にあって兵を募り、浪人や百姓ら九千人ほどの兵を率いて「九州の関ヶ原」と呼ばれる石垣原(いしがきばら)の戦いで勝利。その後も快進撃を続け、九州の大半を押さえるが、官兵衛の予想に反して関ヶ原合戦は1日で決着。家康の命令でやむなく停戦し、「九州を平定して、あわよくば天下を」という夢はここについでたのだった。

そうした官兵衛の野心を知ってか、家康は合戦後も官兵衛には一切の恩賞を与えず、長政に筑前五十二万三千石を与えたが、「家康公は喜んで、両手で私の手を握ってくれました」と報告する長政に、官兵衛は「そのとき、お前の空いた手は何をしていたのだ」と訊ねたという。そこには天下への野望がついに実現できなかった軍師官兵衛の無念さが潜んでいるようでもあった。

官兵衛を育み、支えた家族たち

# 官兵衛をめぐる人々



## 黒田官兵衛

### 黒田長政

官兵衛の祖父。黒田家発祥の地、近江国伊香郡黒田村(滋賀県長浜市木之本町黒田)から父高政に連れられて備前福岡(岡山県瀬戸内市長船町)へ移り、高政没後の大永5年(1525)に龍野を経て姫路にやってくる。妻はこの地の豪族、妻鹿(めが)氏の娘。広峯神社の神主、井口太夫の知己を得、御師(神主に仕える布教者)が配る神符(御札)と一緒に家伝の目録を販売してもらうことで財を成し、当中播磨で最大の勢力を誇っていた御着城主の小寺則職の家臣となった。

### 黒田重隆

官兵衛の祖父。黒田家発祥の地、近江国伊香郡黒田村(滋賀県長浜市木之本町黒田)から父高政に連れられて備前福岡(岡山県瀬戸内市長船町)へ移り、高政没後の大永5年(1525)に龍野を経て姫路にやってくる。妻はこの地の豪族、妻鹿(めが)氏の娘。広峯神社の神主、井口太夫の知己を得、御師(神主に仕える布教者)が配る神符(御札)と一緒に家伝の目録を販売してもらうことで財を成し、当中播磨で最大の勢力を誇っていた御着城主の小寺則職の家臣となった。

### 光姫

官兵衛の母。職隆の妻。歌人で、京の近衛家の歌の師範でもあった明石城主明石正風の娘。雅な女性で、官兵衛に大きな影響を与えたが、官兵衛14歳のときに死去。このため一時期、官兵衛は歌の道にのめりこんだという。 ※明石氏の死去後、職隆はいずれも寡婦(未亡人)であった母里(もり)氏、神吉(かんき)氏を後妻に迎え、それぞれ子を成している。

### 黒田職隆

官兵衛の父。重隆から家督を継ぎ、小寺政職に仕える。慈悲深く武勇にも優れ、政職から小寺の姓を与えられて、その養女(明石氏)を妻とした。御着城の出城である姫路城の城代に任じられ、父重隆とともに新城を築いたといわれる。

### 明石氏

官兵衛の母で職隆の妻。歌人で、京の近衛家の歌の師範でもあった明石城主明石正風の娘。雅な女性で、官兵衛に大きな影響を与えたが、官兵衛14歳のときに死去。このため一時期、官兵衛は歌の道にのめりこんだという。 ※明石氏の死去後、職隆はいずれも寡婦(未亡人)であった母里(もり)氏、神吉(かんき)氏を後妻に迎え、それぞれ子を成している。

### 光姫

官兵衛が22歳のときに娶った生涯ただ一人の妻。志方城主・櫛橋伊定の娘。雅号は幸園(こうえん)。黒田家譜に「容色麗しく才徳兼備」とあり、体も大きく、性格も大らかだったと伝えられる。 ※幸園の姉は上月城主赤松政範の妻で、上月城が落城した際、官兵衛が自分の手柄に代えて義姉と一人の子の助命を嘆願。秀吉に許されたという。

### 黒田長政

官兵衛の嫡男で幼名は松寿丸。姫路城で生まれ、官兵衛が岐阜で信長に会って中国攻めを進言した際、人質として差し出され、秀吉のもとで養育される。官兵衛の有岡城幽閉を裏切りととった信長に殺害されそうになるが、官兵衛の節義を信じる秀吉のもう一人の軍師、竹中半兵衛にかくまわれ、事なきを得た。 官兵衛救出後は父とともに秀吉に仕えるようになるが、関ヶ原の役では徳川家康に味方。その戦功によって筑前52万3千石の大名となった。

### 黒田高友

官兵衛の叔父。職隆の弟で、僧となった増位山地蔵院に住み、休夢(きゅうむ)と名乗る。文芸、茶の湯の道に秀で、後に羽柴秀吉の御伽衆になる。

### 黒田兵庫助

官兵衛の同母弟。黒田二十四騎の一人。官兵衛の異母弟(母は母里氏)。黒田二十四騎の一人。

### 黒田修理亮

官兵衛の異母弟(母は神吉氏)。黒田二十四騎の一人。

### 黒田図書助

官兵衛の異母弟(母は母里氏)。黒田二十四騎の一人。

### 黒田市中右衛門

官兵衛の末弟。父職隆の死去に伴い出家し、光心と名乗る。官兵衛とともに中津に移り、西蓮寺を開山したと伝えられる。

### 妙春

官兵衛の同母妹。幼くして目を患ったが、英賀城主三木氏の一族に嫁ぎ、72歳の長寿を全うしたと伝えられる。

### 妙圓

官兵衛の同母妹。黒田家臣に嫁したが、夫の討死後、仏門に入って尼になったと伝えられる。 ※ほかにも妹の一人が室津(室山城)浦上政宗の子清宗のもとに嫁ぐが、婚礼の夜に龍野城主赤松政秀の軍勢が来襲。清宗は討死したというが、詳細は不明。

### 黒田熊之助

官兵衛と幸圓の次男で、篠の丸城(穴栗市山崎)で生まれた。朝鮮出兵の際は中津城の留守居役を命じられていたが、自らも戦陣に加わるべく朝鮮に渡ろうとしたが風に遭遇。十五歳の若さで水死した。

### 竹森新右衛門

姫路市上天野の生まれ。佐用城攻めで城主克弟を討ち取る働きをするが、別府城の戦いで左手を負傷し、氣遣った官兵衛が旗奉行に任じた。

### 益田与助

加古川市東神吉町の貧しい農家の生まれ。官兵衛に下僕の身分から取り立てられ、足軽大将にまでなったが終生、律儀な正直者だった。

### 林太郎右衛門

信濃国の生まれで播磨国に移り住んで官兵衛に仕えた。槍の達人で、朝鮮の役で虎を突き殺し、講談「加藤清正の虎狩のモデル」になった。

### 原弥左衛門

本姓は原田氏で、筑前国の名族玉珠山(ほうしゅう)やま氏の支流。九州の陣から官兵衛に仕えたが、九州の地理に明るく黒田軍を大いに助けた。

### 坂平右衛門

播磨国三木郡の生まれ。小寺家から黒田家へ移り、官兵衛が小寺政職の遺児を呼び寄せる際には使者を務めた。朝鮮の役でも奮戦した。

### 衣笠久右衛門

近江国の生まれ。幾多の変遷を経て佐々成政(ささなりまさむね)の足軽大将となり、後に長政に仕えた。気象状況や敵情の視察に優れていた。

### 毛屋主水

姫路市井ノ口の生まれで、広峯神社の神主、井口太夫の甥。幼時から官兵衛に仕え、長政が人質として秀吉に預けられたときも供をした。



## 大半が姫路・播磨の出身!

### 官兵衛を支えた個性豊かな家臣団

# 黒田二十四騎

官兵衛・長政に仕えた

黒田家草創期の精鋭24人を選んだ

「黒田二十四騎」。

官兵衛が育てた子飼いの家臣たちで、

大半が姫路・播磨の出身者。

大河ドラマにも登場する

彼らとの出会いが

楽しみです。

	<b>黒田兵庫助</b> 官兵衛の同母弟。姫路生まれ。官兵衛とともに秀吉に仕えて各地を転戦。若くして中津城主となった甥の長政の後見し、家中の多くに慕われた。
	<b>黒田修理亮</b> 官兵衛の異母弟。姫路生まれ。秀吉と弟の秀長に仕え、関ヶ原の役では九州各地を転戦。官兵衛没後、菩提を弔うために画像を赤福寺に納めた。
	<b>黒田図書助</b> 官兵衛の異母弟。姫路生まれ。キリシタンだった官兵衛の影響もあって入信。洗礼名はミゲル。熱心な信者で、秀吉の禁教令後も信仰を貫いた。
	<b>梁山四郎右衛門</b> 姫路市梁山町の生まれ。有岡城に幽閉中の官兵衛を救出。官兵衛臨終の場で愛用の鎧甲を与えられ、長政の補佐役を託された。
	<b>久野四兵衛</b> 播磨国に生まれ、父の代から黒田家に仕え、官兵衛の小姓となった。秀吉の九州平定後、戦乱で荒廃した博多の復興を成しとげた。
	<b>井上九郎右衛門</b> 姫路市白浜町松原の生まれ。黒田職隆に仕え、後に官兵衛に召抱えられた。知略を重んじる戦術家。その才を官兵衛や長政に見込まれた。
	<b>母里太兵衛</b> 姫路市飾磨区妻鹿の出身。大杯の酒を飲み干し、福島正則の秘蔵の槍をせしめた話が、民謡「黒田節」として今に歌い継がれている。
	<b>後藤又兵衛</b> 姫路市山田町に生まれ、官兵衛に養育される。多くの戦功をあげたが、長政の不信を買って黒田家を去り、大坂城に入って買て陣で戦死する。
	<b>黒田三左衛門</b> 有岡城幽閉中の官兵衛を庇護した看守の次男で、恩に報いるために官兵衛が養子に迎えた。芸術家的側面もあり、黒田長政騎馬図を製作した。
	<b>野村太郎兵衛</b> 母里太兵衛の弟で姫路に生まれ、妻の姓を継いだ。幼時から黒田家に仕え、九州の陣で活躍し、宇都宮御房(うづみやのみね)の討伐でも功をあげた。
	<b>桐山孫兵衛</b> 近江国の生まれで、播磨国に移り住んで職隆以下三代に仕えた。官兵衛に従って青山の合戦で初陣。朝鮮の役では長政に従い、高名をあげた。
	<b>吉田六郎太夫</b> 姫路市八代の生まれ。二重半の槍を持ち歩き、多くの戦功をあげた。備中高松城の水攻めでは、船の底に穴を開けて沈め、川をせき止めた。
	<b>小河伝右衛門</b> 播磨国美養郡の生まれと伝えられる。官兵衛に従い九州の陣で高名をあげる。朝鮮の役で働き、小西行長から「日本一の勇士」と賞賛された。
	<b>菅六之助</b> 美作国の名族の出身で、たつの市新宮町で生まれた。幼時から黒田家に仕え、関ヶ原の役では小早川秀秋の腹返りを画策する使者となった。
	<b>三宅山太夫</b> 姫路市飾磨区三宅の生まれ。官兵衛が孫子の一節「不動如山(うごかざること)やまのこと」から山太夫と名乗らせ、後に黒田水軍を任された。
	<b>野口左助</b> 加古川市野口町生まれ。父は教信寺の僧で母里太兵衛は養父にあたる。佐用城や三木城攻めで名をあげ、九州の陣、朝鮮の役でも活躍した。
	<b>村田兵助</b> 姫路市井ノ口の生まれで、広峯神社の神主、井口太夫の甥。幼時から官兵衛に仕え、長政が人質として秀吉に預けられたときも供をした。

※いずれの家臣にも別名があり、出身地についても異説があります。黒田二十四騎画帳／福岡市博物館蔵

# 旧播磨国内



**19 佐用城跡(佐用郡佐用町)**  
天正5年(1577)に秀吉勢が攻めた毛利方の城。先陣を務めた官兵衛は「孫子」の兵法を用い、城の三方を囲んで一方をわざと開け、そこから逃れようとした城主の福原則尚(のりひさ)らを兵に討たせ、城を落とすという。



**20 志方城跡(加古川市志方町)**  
榊橋伊定の居城で官兵衛の妻光姫の実家。伊定が三木城の別所についたため、天正6年(1578)に秀吉軍によって落城。本丸跡には観音寺が建つが、寺の裏にはかつて水をたえたえんがせがあったという。



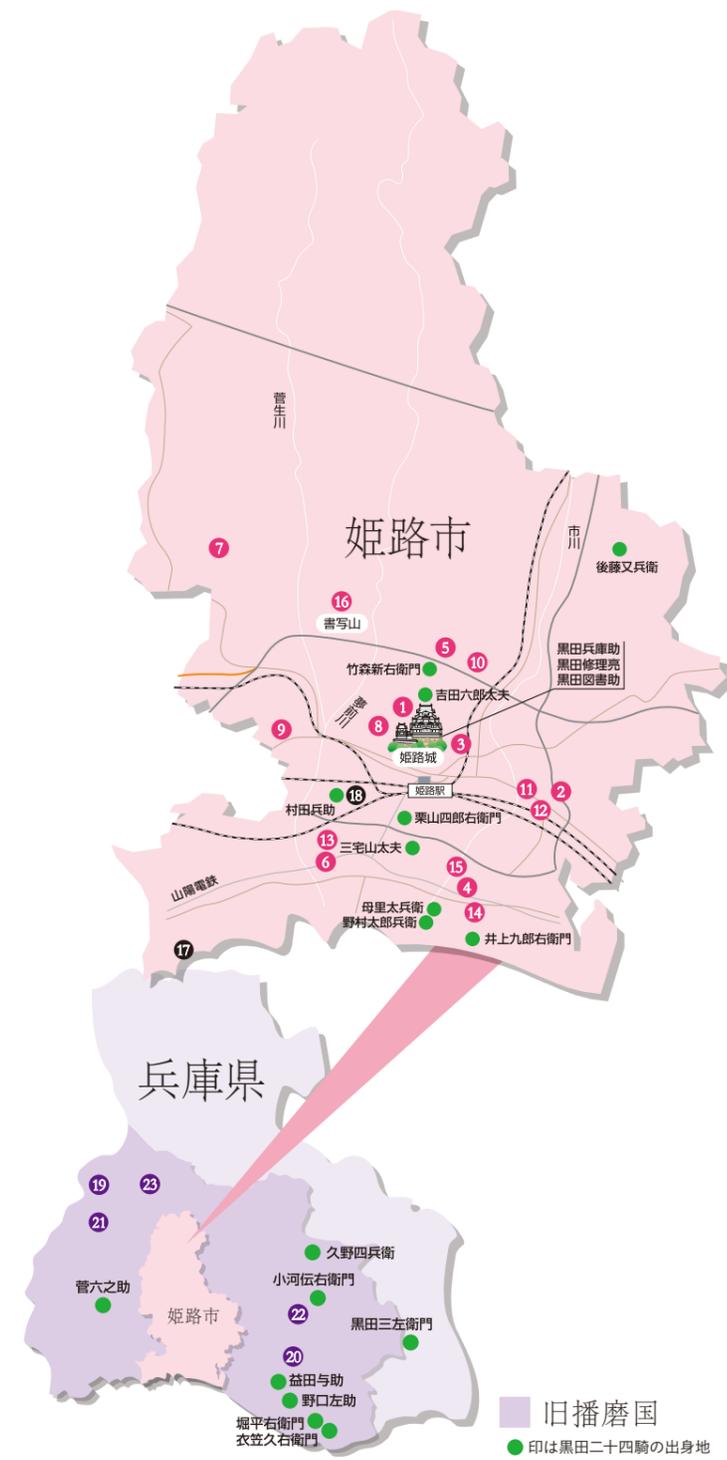
**21 上月城跡(佐用郡佐用町)**  
織田・毛利の二大勢力にはさまれて、半年間に二度も落城した悲劇の城。まず天正5年(1577)には毛利方の城主赤松政範が秀吉の軍勢に敗れて自害。城は山陰の名門で家の再興を願う尼子勝久と家臣の山中鹿之助に預けられたが、翌年、今度は毛利の大軍に包囲され、再び落城した。城の遺構が比較的よく残り、本丸跡には政範の供養塔も立つ。



**22 三木城跡(三木市上の丸町)**  
信長に反旗を翻した別所長治が播磨の諸将とともに籠った城。「三木の干殺し」と呼ばれる兵糧攻めで餓死者が続出し、長治は別所一族の命を引き換えに士卒の助命を願願。天正8年(1580)1月に長治らが自害して城は落城した。城跡の近くに別所氏の菩提寺雲龍寺があり、境内に自害した別所長治と妻照子の墓が記されている。



**23 篠の丸城跡(宍粟市山崎町)**  
三木城を陥落させた秀吉が続いて攻め落とした城。官兵衛も参加し、その功により播磨郡などで一万石を与えられ、この城を居城にした。本丸跡に碑が立ち、二の郭、三の郭跡、空堀や土塁の跡が残る。



## 1 姫路城(本町)

現在の姫路城は関ヶ原合戦の後に池田輝政が築いたものだが、『姫路城史』は永禄4年(1561)に官兵衛の祖父重隆と父職隆が姫山に新城を築いたとしており、これが姫路城と呼べる最初の建造物ではないかとされている。



官兵衛が生まれたのは新城が築かれる15年前の天文15年(1546)のこと。姫路城の「に」の門櫓に十字紋の鬼瓦が残っており、キリシタンだった官兵衛ゆかりのものではないかといわれている。



# 姫路

## 訪ねてみよう! こんなにもある 姫路と播磨の 黒田家&官兵衛 ゆかりの地



**3 播磨国総社(総社本町)**  
播磨国総社(惣社)は歴代姫路城主の崇敬を受けてきたが、職隆も永禄10年(1567)に拝殿や表門を再建。また、天正8年(1580)に揖東郡などで1万石の大名になった官兵衛も、播磨国総社に詣でて新しく制定した黒田家の軍旗の祈禱を受け、同12年(1584)には札札を与えるなど、その保護に努めた。



**2 御着城址(御野町御着)**  
赤松氏の一族で西播磨最大の領主だった小寺政隆が築き、本城とした。官兵衛は小寺政隆にその才能を認められ、家督を継ぐまで御着城で政隆の近習として仕えた。御着城跡公園内には、黒田官兵衛の顕彰碑が建立されている。



**8 姫路文学館(山野井町)**  
官兵衛を主人公にした『播磨灘物語』を書いた司馬遼太郎の記念室があり、多彩な関連資料を展示。司馬は祖父の代まで姫路市に住み、その先祖は英賀城に籠城して秀吉軍と戦った武将の一人だったという。



**7 林田大庄屋田三木家住宅(林田町中瀬)**  
三木家は、英賀城主三木氏の出自と伝えられる。天正8年(1580)、羽柴秀吉による播磨侵攻により英賀城が落城し、一族は各地に逃れたが、当家は林田に来て帰農し、江戸時代を通じて林田藩の大庄屋をつとめた。



**6 英賀神社(飾磨区英賀宮町)**  
英賀城跡にあり、英賀彦・英賀姫を祀る古社。境内に司馬遼太郎の『播磨灘物語』の文学碑が建ち、英賀城の土塁跡も残る。



**5 広峯(ひろみね)神社(広嶺山)**  
備前福岡から姫路にやってきた重隆は、広嶺山にある広峯神社に詣でて神主と会い、御師と呼ばれる人たちに神社の神符とともに家伝の目録を売ってもらうことで財を成し、黒田家の礎を築いたと伝えられる。



**4 黒田職隆廟所(飾磨区妻鹿)**  
天正13年(1585)に国府山城で亡くなった職隆の墓所。国府山南方の住宅街にあり、地元では「筑前さん」と呼ばれている。



**15 英賀城跡(飾磨区英賀宮町)**  
夢前川の河口近くで勢力を誇った三木氏の居城。英賀には播磨の本願寺門徒の拠点である英賀御堂があり、三木氏も門徒衆とともに信長に敵対したため、天正8年(1580)、秀吉の大軍によって落城。官兵衛も町坪(ちょうのつぼ)の出城を攻撃し、これを落とした。



**12 牛堂山国分寺(御野町国分寺)**  
天正6年(1578)、毛利の大軍が上月城を包囲。秀吉の軍勢が救援に赴くが、その際に乗じて三木城の別所勢が東方から攻め寄せたため、官兵衛は急ぎょ姫路に引き返し、国分寺に拠って撃退したと伝えられる。



**11 黒田家廟所(御野町御着)**  
御着城址の一角にあり、左に重隆、右に官兵衛の生母明石氏の供養塔が並ぶ。黒田家が福岡に移り、一時は寂れていたが、黒田藩十代藩主斉清(なりきよ)の手によって再建された。



**10 増位山随願寺(白国)**  
官兵衛の叔父高友が僧となり、休夢と称して増位山の地藏院に住み、有明の峰に構(城)を築いたとされる。三木城の別所氏との間でたびたび戦場となり、天正元年(1573)に堂塔がごとごとく破却されたが、秀吉によって再興された。



**9 青山古戦場跡(青山)**  
官兵衛が初めて指揮して、赤松政秀の軍勢に勝利した古戦場跡。赤松勢は現在の夢前川西岸の青山に陣を構え、官兵衛は東岸の土器(かわらけ)山(姫路下手野)に陣を敷いたという。戦場跡はゴルフ場になっており、石碑がその歴史を伝えている。

## なるほど まめ知識



**17 網干陣屋跡(網干区興浜)**  
天正8年(1580)、秀吉から網干を含む播磨郡1万石を与えられた官兵衛は、そのお礼に秀吉を網干に招待。松が生い茂る播磨川河口の沖之浜の陣屋で大茶会を催したところ、秀吉の席の近くの大松に1羽の鶴が見事な巣をかけており、秀吉が陣屋の名を「鶴松亭」とするよう命じたという。

**18 法輪寺(湯沢山茶くれん寺)(井ノ口)**  
英賀城攻めの際に秀吉が茶を所望して立ち寄った寺。誰も秀吉と気づかず、「お茶は姫路のお殿様(秀吉)のために用意しているもので、それ以外の方には差し上げられません」と断られたので、秀吉は「わしが、その秀吉じゃ」とカラカラと笑い、この寺に「湯沢山茶くれん寺」という寺号を与えようと言ったという。



**16 書写山圓教寺(書写)**  
「西の比叡山」とも呼ばれる天台宗の古刹。天正6年(1578)、三木城の別所長治が反旗を翻したとの報せを聞いた秀吉は、西の毛利勢との挟撃を恐れた官兵衛の進言で、一時、本陣を山内の十地坊に移したという。



**15 国府山城址(飾磨区妻鹿)**  
市川河口左岸の国府山(甲山)に職隆が築いた城。山上からは姫路城が望め、すぐ南は海という立地の良さで、秀吉に姫路城を譲り渡した官兵衛は職隆とともにこの城に移った。重隆の妻が当地の名門妻鹿氏の出身で、黒田氏と妻鹿との結びつきは強かった。



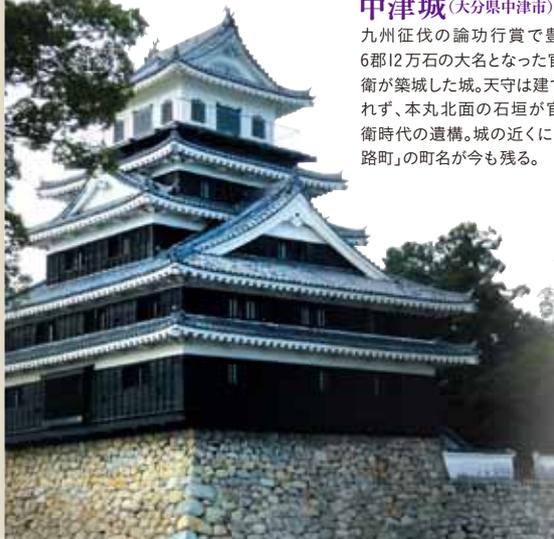
**14 松原八幡神社(白浜町甲)**  
羽柴秀吉がこの地を平定したとき、この神社を城南の芝原(今の姫路市豊沢町)に遷すように命じた。そのとき官兵衛が秀吉に松原は由緒ある地だと論じ、社領を減じられながらも松原八幡神社はこの地で存続することができた。

黒田家の足跡を訪ねて  
姫路から豊前、そして筑前へ

# 官兵衛 ゆかりの地

## 中津城(大分県中津市)

九州征伐の論功行賞で豊前6郡12万石の大名となった官兵衛が築城した城。天守は建てられず、本丸北面の石垣が官兵衛時代の遺構。城の近くに「姫路町」の町名が今も残る。



## 有岡城跡(兵庫県伊丹市)

官兵衛が幽閉された荒木村重の城。城下町の周囲を堀と土塁で囲む総構えの城だったが、明治時代に城郭の大部分が削られた。当時の石垣がJR伊丹駅前の史跡公園の奥にわずかに残る。



## 崇福(そうふく)寺(福岡県福岡市)

黒田家の菩提寺。官兵衛・長政を始め歴代福岡藩主や一族の墓がある。



## 妙興寺(岡山県瀬戸内市)

古くから物資の集散地として賑わった備前福岡(長船町福岡)にある古刹。「黒田家墓所」があり、官兵衛の曾祖父父高政の墓と祖父重隆の供養塔と伝えられる2基の石塔が残っている。



## 福岡城跡(福岡県福岡市)

関ヶ原合戦にて勝利し、筑前52万3千石を与えられた長政が官兵衛とともに築いた城。明治以後、多くの建物が失われたが、隠居した官兵衛が妻光姫と播州の思い出を語りながら余生を過ごした御鷹(おたか)屋敷跡や母里太兵衛邸の長屋門などが残る。



## 黒田廟所(滋賀県長浜市)

琵琶湖の北端に位置し、『黒田家譜』で黒田家発祥の地とされている旧黒田村(木之本町黒田)にある墓所。「黒田氏旧縁之地」と刻まれた石碑と「黒田判官代・源宗清」と刻まれた墓石が残っている。



## 備中高松城跡(岡山県岡山市)

秀吉軍の前に立ちはだかった毛利方の清水宗治(むねはる)の城。水攻めを行っている最中に本能寺の変が起こり、秀吉は官兵衛の進言で毛利方と講和。明智光秀との決戦に向けて「中国大返し」を敢行した。本丸跡のみが公園となって残っている。

## 姫路生まれの黒田官兵衛が大河ドラマの主人公に!

平成26年の大河ドラマに、黒田官兵衛の生涯を描いた「軍師官兵衛」が決定!  
官兵衛役を、人気グループ「V6」メンバーで俳優の岡田准一さんが務め、平成26年1月から放送されます。



かんべえくん

## 官兵衛イメージキャラクター

# 「かんべえくん」登場!!

官兵衛が姫路で活躍した青年期をイメージ。  
姫路を象徴する白鷺を羽織にデザインし、「采配」を持った天才軍師です。  
また、キャッチコピーは「ひめじの官兵衛 見参!」と「はりまの官兵衛 見参!」に決定。  
これからいろいろな場面に登場しますのでよろしくね!

【使用に関するお問い合わせ】 姫路市観光交流推進室 (Tel: 079-287-3652)  
「かんべえくん」のデザイン・キャッチコピーに関する著作権、使用权は、ひめじ官兵衛プロジェクト推進協議会に帰属します。

## 官兵衛TOPICS

『ひめじ官兵衛プロジェクト推進協議会』では、平成26年大河ドラマ「軍師官兵衛」の放送に向け、さまざまな事業を展開してまいります。

ひめじ官兵衛プロジェクト推進協議会 TEL 079-287-3808

<http://himeji-kanbee.jp/>



姫路市イメージキャラクター

## しろまるひめ

しろまるひめも官兵衛の特長でもあるおわん型の兜をかぶってPRします!

【観光に関する問い合わせ先】

## 姫路市観光交流推進室

〒670-0012 姫路市本町68番地

TEL 079-287-3652

FAX 079-287-3657

